

かと思う。

極東軍司令官は、マウントバッテン将軍である。これは終戦前の体験である。しかし、マウントバッテンは馬來半島には上陸しなかった。本にもそのことが書いてある。

私が憲兵隊に協力したため、終戦時に終戦に協力した兵も憲兵隊も監獄に入れられた。しかし我々は直接戦犯にはならなかったが、二十二〜二十三人は起訴された。

大石憲兵隊長は絞首刑、他十数人も絞首刑、他に多数の者が処刑された。

### 朝鮮・ソ連 従軍記

愛媛県 谷本 祥 聰

私は、大正十一（一九二二）年九月二十六日、愛媛県伊予郡中山町で生まれました。

昭和十八（一九四三）年四月一日、広島県福山市の歩兵第一四一連隊補充隊第三中隊第一班へ入営しました。その当時の谷本家は、

祖父 健在 農業 水田 一町歩

畑 一反

山林 若干

祖母 健在 農業

父 健在 農業

母 健在 農業

本人（長男） 健康 農業

妹三人 健在 学生

以上のような構成で、農家としてまあまあの生活をしていました。我が兵役のため家を出ることは、

時局重大な時節柄、国民の義務として、当然の事と家族は覚悟しておりました。

さて、入営のため家を出て福山へ行く日となりました。私の場合私独りだけで、ヒソソリと家を出て家族と別れ、郡中の駅から松山へ、高浜から尾道へ、そして福山へと行きました。兵舎の衛門を通る時も見送る人はなく、大した感慨もなかったです。本当です。

第三中隊第一班（小銃班）へ編入され、今までの私服はパンツまで脱ぎ、真新しい越中褌に着替え、その上は官給の襦袢（ジバン）、腰下（コシタ）、軍袴（ゲンコ）、軍衣です。新兵に与えられた被服は世間の常識を通りこした「こんなもの着せられるのか！これはまさに人のいやがる軍隊だな。今から娑婆とは縁切り。頭や気持ちの一〇〇％の切り換えだぞ」と自分に言い聞かせました。初年兵教育係助手の上等兵殿、古兵殿と八人位いました。

入営第一日目はまあお客さん待遇で、すべて古参の人を見習って、内務班教育や躰のあり方を見聞して兵の第一歩を踏み出しました。

二日目からはもう新兵としてミツチリと仕込まれ鍛えられます。歩いていることはない。皆走っている。その間にビンタがとぶ。対抗ビンタも初めて経験しました。とにかく軍隊とは敵と戦争をして勝たねばならぬ。無駄、隙、漫然、冗長等一切やめて、正確に最短時間に、他人よりも優秀な成果を挙げなくては、生存競争の烈しさは言葉では言えない位だ。しかしその中にも戦友愛という暖かい感情、連帯感、かばい合い等のプラスの面も芽生えてくる。それが時間、歳月の経過と共に、精鋭な部隊に仕上がって行くのです。

一方、野外の訓練は、芦田川の河川敷を練兵場代わりにして行われました。とにかくきつかった。班長殿は「悟りが悪い。一度言ったら悟らにゃいかん」とビンタも時々ある。

軍人勅諭の暗記の時、詰まっつて言えぬと即ビンタ。とにかくビンタは多かった。

昭和十八年六月末、初年兵教育終了。

昭和十八年九月中頃、歩兵第四十一連隊へ転属のため下関港出発、釜山へ上陸。朝鮮平壤着。

昭和十九年二月、補助憲兵要員として平壤憲兵隊へ入隊しました。

昭和十九年四月二十九日、上等兵に進級。第四

十一連隊第九中隊へ編入。

昭和二十年五月、兵長に進級。

平壤では南方のレイテ島へ征く部隊の見送りに駆り出され、大声で励ましては武運長久を祈ったことを思い出します。

またこの間、朝鮮人兵を静岡県での農作業に使いました。そのため平壤と釜山間を有蓋貨車に約三十人を乗せて列車輸送で、私はその監督と警戒を兼ねて乗務しました。その時朝鮮人兵が貨車より飛び降りて脱走をしましたが、幸運にも私の貨車からの脱走はなくてホッとしました。

一方、補助憲兵としての教育は隊内で行われ、腕章（白い布地に赤文字で憲兵と朱書きされた）を腕に巻いていました。業務と言えば、物資、食糧の流通が悪いためのヤミ物資の取締り（この経済取締りは日本内地でも、戦争中から終戦後久しく行われたことを記憶している）を行ったり、思想の悪化を防ぐため朝鮮人の逮捕等をしておりました。

昭和二十年八月十五日、思いもかけぬ終戦です。皆呆然としてなすところを知らずでした。

「エーイツ。負けたんじゃ！ 酒でも呑むか！」と隊内の規律も乱れ勝ちとなる。上からの訓示で「自重、静観、慎重、無事帰国、日本の再建」を諭してくれる。やはり日本の軍隊である。軍紀風紀を厳にして、元の整然とした軍隊生活を取り戻しました。が、外部はそうではない。尖鋭グループに扇動された朝鮮人の不満分子による、暴行迫害の被害も少なくない。

その中にソ連軍が平壤へ来て、日本軍は抑留されました。我々は前後の事情を考えて隠忍自重、泣きの涙で歯を食いしばり辛抱するしかない状況でした。敗戦という異状事態に翻弄される経験は日本開關以来のこと。日本の戦争指導、戦局運営の拙さ、反省し将来二度と敗戦の憂き目を見て苦しむなんて事のないようにしなければならぬ。

### 満ソ国境の戦闘と抑留

香川県 大塩 義 武

私は香川県さぬき市津田町鶴羽に、大正六（一九一七）年十一月二日生まれました。家は代々半農半漁の生活です。三人兄弟で弟は大正九年生まれですが現役で満州に入隊、昭和二十（一九四五）年八月二十日、牡丹江付近で戦死しました。

妹は大正十三年生まれですが、昭和二十年四月病死しました。父親は私が十五歳の時病死して母親が家を守っていました。

私も指物大工をしていましたが戦争のため資材が無くなり店を続けることができなくなっていました。

昭和十四年一月、満州国の警察官の採用試験が高松市の武徳殿であり、受験しました。受験者八十二人あり学科で十二人合格、体格検査で九人となり、身元調査の結果、香川県では僅か五人が合